

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

### 平成20年度派遣報告書

——インドネシア・ハサヌディン大学, ブギス語, 派遣期間 (H20.6.8-H20.8.24) ——

平成18年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 (5年一貫制) 3回生

岩田 剛

#### 研究テーマについて (～600 字)

「恥一名誉」の概念はアジア・太平洋地域のオーストロネシア諸社会において広く重要な価値規範とみなされている。インドネシアの南スラウェシ地方において、「恥一名誉」の概念はシリ (siri) と表現され、規範体系の根幹をなす概念とされる。南スラウェシ、なかでもブギス人やマカッサル人の間では一般にシリが侵害されたら、その「恥」をそそぐために命を賭して「名誉」を回復しなければならないといわれる。シリが最も強く作用するのは婚前交渉をめぐる問題であり、特に駆け落ちは女性側親族のシリをいたく傷つけ、「名誉」回復のために彼らが駆け落ちした男女の殺害に及ぶこともある。南スラウェシは現代に至るまでインドネシアで最も多く殺傷事件が発生する地域として有名であり、その背景にはシリが強く作用しているという言説が広く流布している。

本研究は、南スラウェシにおける「恥一名誉」の概念について、1) 参与観察にもとづく長期間のフィールドワークをとおして、人びとの日常生活におけるシリの様態をさぐること、2) 新聞、政府刊行物等の地方文書や人びとの語りの分析をとおして、シリをめぐる言説の歴史の変遷を記述・考察することを目的としている。また現在、インドネシアの地方社会ではスハルト政権崩壊後の地方分権化にともない、地方文化や慣習法が重要視されるようになってきている。南スラウェシにおいて地方文化や「恥一名誉」の概念がおかれている今日的状況についても調査研究をおこなう。

#### 研修言語の概要 (～200 字)

ブギス語は、南スラウェシ地方を故地とするブギス人の共通言語であり、話者人口は約 350～500 万人と推測されている。言語学上は、オーストロネシア語族、(西) マラヨ=ポリネシア語派、スラウェシ・グループに分類される。ブギス語はロンタラ文字とよばれる独自の文字 (南インド系) を有する。ブギス語には各地方ごとに方言がみられ、方言間の偏差はやや大きい。特に半島の東部と西部で大きな違いがみられる [山口 1993; Noorduyn 1991]。

他のインドネシア地方社会と同じように、現在南スラウェシに住む多くブギス人はインドネシア語との二重言語話者である。しかし、近年では都市部に住むブギス人のなかには若者を中心にブギス語を話せない者も増えつつある。

#### 語学研修の内容 (～600 字)

文化の理解にあたって言語能力は必須であり、本研究にとってもブギス語あるいはマカッサル語の習

得はかせない。どちらの言語を選ぶべきかかなり迷ったものの、南スラウェシにおいてブギス人が人口、政治の側面で歴史的に卓越してきたことから、ブギス語を学ぶことにした。

本研修では、ブギス語の基本的な文法知識と、簡単な日常会話能力を身につけることを目標とした。研修はハサヌディン大学 (Universitas Hasanuddin) 文化学部 (Fakultas Ilmu Budaya, 写真1参照) の外国人向けインドネシア語 (BIPA : Bahasa Indonesia untuk Penutur Asing) コースにて、期間は2ヶ月間強、頻度は週4~5回、1回の講義は100~120分、講義形式はマンツーマンで、講師は文化学部地方語文学科とインドネシア語学科に所属する先生3人が交代で授業をおこなってくれた。はじめの15回ほどで初級文法、文字、発音をひとつおとり学習し、16~35回までの授業は、読解と会話が中心の内容となった。上述のようにブギス語は地方毎に異なる方言が話されているため、研修では標準とされるボネ方言に焦点をあてて講義をしてもらった。授業はインドネシア語でおこなわれた。

毎回の授業は、挨拶の練習からはじまり、宿題の確認と添削、その日のメイン学習内容とつづく。

3人の先生はそれぞれ、文献学、言語学を専門としており、各自の専門にそって授業を展開してくれた。外国人がブギス語を学習するための専門の教材がないため、先生が独自に作成したオリジナルの教材や、小学校低学年用の教科書(地方語科目用)をもちいた。私の研究のために、婚姻、慣習法、格言、禁忌などに関わるテーマを扱った読み物も用意してもらった。

また、研修後に提出するワードバンクの作成をかねて、1,000語ほどの語彙リストを作成し語彙力アップをはかった。



写真1： ハサヌディン大学文化学部



写真2： 授業の光景 その1



写真3： 授業の光景 その2



写真4： 授業板書の一例

## 研修期間中に印象に残った体験や経験 (~400字)

研修を受けたハサヌディン大学のあるマカッサル市では、日常会話レベルにおいてはインドネシア語とマカッサル語が一般にもちいられている。また、マカッサル市滞在中のホームステイ先はトラジャ人

家庭だったため、週末は研修言語を直接つかうためにブギス語が話されている地域（マカッサル市郊外のマロス県など）にでかけるようにした。私にとってブギス語の学習は、文法の複雑さや、文語と口語のあいだの大きな隔たりから、とっつきにくく感じられた。しかし、研修期間中に私が会ったブギスの人の多くは、私がブギス語を学習していることを好意的に受け止めてくれた。

今回の研修期間中は、語学研修の授業外の時間をつかって、文献収集と今後の長期フィールドワークのための調査候補地訪問をおこなうつもりだった。しかし、ブギス語の学習が思った以上に大変で研修期間も短かったため、語学の学習に集中することにし、それ以外の研究活動はほとんどおこなわなかった。

### 目標の達成度や反省点について（～400字）

今回の語学研修をとおして、ブギス語の文法に関するおおまかな知識と、簡単な日常会話能力を身につけることができ、当初の目標をおおむね達成できた。しかし、私が出会ったほぼすべてのブギス人がインドネシア語を話すため、教室の外では意識してつかわない限り、ブギス語の会話を練習する機会があまりなかった。現時点での私のブギス語は習得というにはまだほど遠いレベルであり、今後も地道に学習を続けたい。

報告者は、本研修の参加後、南スラウェシ州において長期間のフィールドワークをおこなう予定である。本プログラムの派遣によって長期フィールドワークの資本となる語学を集中的に学習することができ、たいへん有意義であった。最後に、本 ITP プログラム事務局とブギス語の先生方にこの場を借りて御礼申し上げたい。

### 参考文献

山口真佐夫. 1993. 「南スラウェシ語群の言語」『京都産業大学国際言語科学研究所報』14(2): 81-121.

Noorduyn, J. 1991. *A critical survey of studies on the languages of Sulawesi*. Leiden: KITLV Press.